

(令和3年9月試験研究業務月報)

試験研究課題：京都オリジナル早生良食味米新品種「京式部」の特性を最大限発揮する
栽培方法の確立

研究

早生良食味米「京式部」の成熟期調査

高温耐性を持ち、京料理に合う早生良食味米新品種として、農研機構と共同で候補の系統から収量や食味などが優れたものを選定し、令和2年8月に「京式部」として品種登録出願を行いました。

当センターでは、「京式部」の特性を最大限発揮する栽培方法を明らかにするため、様々なパターンの肥料施用体系や栽植密度等の条件を設定して研究を行っています。9月からは、成熟期調査を行うとともに、籾の黄化を確認しながら、坪刈りを行いました。

また、タスクチーム*活動において、現地の一発型肥料試験ほ場へ巡回を行い、生産者へ適期収穫や出荷調製について技術支援を行いました。

今後、収量・品質調査を行い、得られた生育データに基づいて栽培技術を確立するとともに、タスクチーム活動によって早急に生産者への普及を推進していきます。

※タスクチーム活動：研究機関と普及組織等の総合力を発揮し、生産者を伴走支援することで現地課題を早期に解決する活動



研究所の肥料試験ほ場



現地の一発型肥料試験ほ場

(令和3年9月試験研究業務月報)

試験研究課題：画像等を活用した丸太情報の見える化と木材流通のスマート化

情報

第39回日本木材加工技術協会^{※1}年次大会で優秀ポスター賞を受賞

京都府産木材の利用拡大及び供給量増加・安定供給が求められる中、当センターでは、ICT技術を活かした流通の合理化と丸太生産の低コスト化を目指した取組を行っています。具体的には、はい積みされた丸太の画像をもとに本数・径級・材積を解析する「木材検収アプリ」と、丸太段階で製材品の強度等級を推定する「強度推定アプリ」の開発に取り組んでいます。

今回、9月29日～30日に開催されました標記年次大会において、アプリの現場導入に向けた取組状況を報告しましたところ、その内容が認められ優秀ポスター賞を受賞^{※2}しました。

なお、年次大会は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からオンラインでの開催となりましたが、コアタイムにおいて関心がある参加者から多数の質問もあり、別途情報交換も依頼されるなど、今後の研究の広がりや弾みをつけることができました。



発表したポスター



コアタイム(オンライン)での説明の様子

※1:公益社団法人日本木材加工技術協会は、日本木材学会と並び、木材に関する学術の振興と技術の向上等を目的として、1948年に設立された団体です。

※2:アプリの活用を想定した木材流通の合理化とコスト削減効果の検証結果を報告した、日本木材学会年次大会(本年3月開催)に続いての受賞となりました。

(令和3年9月試験研究業務月報)

試験研究課題：丹後地域における産地強化のための果樹複合経営の確立

研究

省力的栽培が可能なブドウ品種の調査

丹後地域ではナシ、ブドウ、モモなど組み合わせた果樹栽培に取り組まれている生産者が多く、繁忙期の作業の省力化は大きな課題です。ブドウでは房の粒を間引く摘粒作業が大きな負担となりますが、当所では摘粒の手間があまりかからないと言われている新品種‘BKシードレス’を用いた省力化の試験を行っています。本年は9月13日から果実を収穫しており、6月初旬の花穂整形（3通り）によってどのような果房になったか調べ、より相応しい方法を検討しています。



花穂整形の方法による果実の形の比較

農林センター（丹後農業研究所）

宇治茶文化講座 2021 の第 1 回講座を開催

京都府と京都文教大学が共催の「宇治茶文化講座」は、宇治茶の世界文化遺産登録に向けて、宇治茶の魅力と価値を学ぶことを目的に開催しています。今年で8年目を迎え、昨年よりオンライン講座としたことから国内の宇治茶ファンをはじめ、今回、海外からの受講が2件あるなど、お茶に興味のある方の受講が増えてきています。

当所で行われた第1回講座は、約100名の受講があり、当所の歴史や研究成果の説明、オープンラボの案内、茶園でのクイズを交えながらお茶の栽培について学んでいただきました。最後に、おいしいお茶の淹れ方を研究員が実演しながら説明し、文教大学学生「宇治☆茶レンジャー」とともに淹れたお茶を楽しみました。受講者からは「茶研でやっていることがよく分かった」、「茶園現地レポートやお茶の淹れ方の実演などでわかりやすく楽しめた」などの声が聞かれたほか、「品質向上やニーズに合ったお茶などを更に研究してほしい」という御要望もいただきました。

今後このような広報活動を通じて宇治茶ファンの裾野を広げ、京都産茶の生産振興につなげる活動を行っていきます。



Zoomによる配信



おいしいお茶の淹れ方を説明

(令和3年9月試験研究業務月報)

試験研究課題：生産性や品質を向上させた俵型の大納言小豆新品種の育成

研究

小豆新品種候補の生育特性を調査中

当センターでは、俵型でインゲンマメモザイクウイルス（BCMV）抵抗性を持ち、機械収穫に適した大納言小豆の新品種育成に取り組んでいます。

これまでに、府内で収集した遺伝資源を交配して、ウイルス病抵抗性を有し、大粒俵型で、収量は京都大納言と同等以上の有望系統を4系統選抜しました。

今年度はこれらの系統と対照品種を栽培し、「アズキ種審査基準」に従って、開花期や頂小葉の長さ・幅等について調査し、品種登録出願に必要な特性を確認しています。

今後は、他の項目の成熟期や茎の長さ、さやの長さ・幅、子実の長さ・幅等を調査し、育種系統の区別性を明らかにする予定です。また、現地および所内での栽培試験、加工適性試験の結果を踏まえて、品種登録出願する候補を1系統に絞り込み、令和4年度に品種登録出願する予定です。



開花期調査の様子

各既品種（上段）・育成系統（下段）の頂小葉の形

試験研究報告会の発表動画を YouTube 配信

新しい取組として当センターの試験研究報告会発表動画を期間限定で YouTube 配信しました。

農林水産業の関係者を中心に PR したところ、畜産センターが作出した「京地どり」に関する試験研究や「畜舎でのネズミ侵入防止対策」、「畜産人材研修」といった伝染病予防対策や担い手育成などの視聴回数が多く、1か月の公開期間中に合計 222 回の視聴がありました。広く発信することで多様な視聴者の目にとまり、関心をもっていただくことができました。

今後も畜産農家の支援につながる試験研究や業務調査に努め、成果を様々な形で公開していきます。



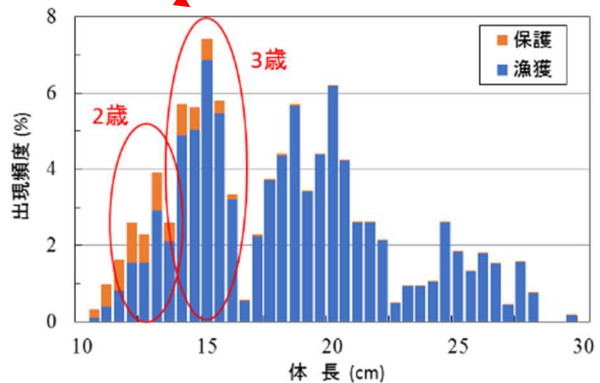
令和3年度畜産センター試験研究報告会の視聴ページ

アカムツ（のどぐろ）の漁獲物調査と資源管理の取り組み

底びき網漁が9月から始まり、産地市場では、消費者ニーズが高いアカムツの水揚げが続いています。海洋センターでは、アカムツ資源の持続的な利用に向けて、市場に水揚げされるアカムツの体長組成や未成熟な小型魚を保護するための網目拡大の効果などを調べています。

例年、体長12~13 cmの2歳魚が水揚げの主体ですが、今年は15 cm前後の3歳魚が多いのが特徴です。これは2018年生まれが他年に比べ多かったためと考えられます。

アカムツ漁では、多くの漁船で13節（約2.5cm）の細かい網目が使われ、小型魚の多獲が問題となっていますが、一部の漁船で9節（約3.8cm）に網目拡大されたことで、市場価値がなく海上でリリースされる体長10 cm未満の1歳魚の約半分が保護されています。今後は6節（約6cm）に拡大することで、より多くの小型魚の保護を目指し、漁業者との協議を進めていきます。



網目9節で漁獲されたアカムツの体長組成（9月2日舞鶴市場）

（6節に網目拡大することでオレンジ色の部分が保護されます）